樋口一葉『やみ夜』論
――格差社会の〈闇〉を読む――

西村　英津子

一．はじめに

樋口一葉『やみ夜』（明治二十七年七、九、十一月『文學界』）については、一葉作品の分岐点に位置する作品であるという見方が定着し、それを前提としたうえでの作品分析が行われてきたと言える。北川秋雄氏は、「『やみ夜』論―年上の悪女―」の中で『やみ夜』の研究史について丁寧に整理しているが、そのなかで、北川氏は、関良一氏、前田愛氏の「『やみ夜』を一葉文学の転機とし、明治社会を批判したもの」という説は「動いていない」としている（注1）。

また、先行の『やみ夜』論は、主人公松川お蘭を「魔性の女」（中川清美）であることを前提にして、お蘭の「魔性」性をめぐってさまざまに検証され、議論されてきた。お蘭の「魔性」性との関係の中で、副主人公と言えるお蘭に惚れ込んだ高木直次郎についても付随的に検証されてきたと言える。つまり、従来の先行研究自体が、お蘭の「魔性」性に重点を置き過ぎ、その結果、高木直次郎や、長年松川邸に仕えてお蘭と共に暮らしていた佐助・おそよという老夫婦についての検証は置き去りにされてきた。

『やみ夜』は、中山清美氏が指摘したように「お蘭が、自らの心の奥底に沈む「女夜叉の本性」を語」る「語る女の側の物語」という特徴を持っている（注2）。しかし、作品は、「語る女」＝お蘭の言葉だけで成立しているのではなく、語り手は、直次郎や佐助・おそよ夫婦についても語り、また、彼らに語る権利を与えている。『やみ夜』は、決して、お蘭の独り語りの物語ではない。それにもかかわらず、従来の先行研究は、お蘭の「魔性」性や松川邸のイメージ、作品最後でお蘭が直次郎に波崎暗

殺を依頼したことの強烈さに解釈の重点がおかれていることによって、『やみ夜』の作品解釈は偏頗になっていると言わざるを得ない。もっとも、比較的近年発表された、橋本のぞみ氏の「『やみ夜』―傀儡の他者性―」(注3)では、直次郎の立身出世意識について検証を加えており、これは評価されるべき成果だと言える。

本稿においても、お蘭の分析とともに、直次郎と立身出世の問題、お蘭を赤ん坊の頃から見守ってきた佐助・おそよ夫婦についても検証し、この人間関係のなかで、お蘭の人物像を検証し直し、さらには、作品の新たな読みを提示することを試みてみたい。以下、作品分析に入る前に、本稿の問題意識についてもう少し具体的に述べておきたい。

明治二十年代の文学作品の主流となり、文学史の中でも明治文学の代表作品として紹介されるものの主人公たちの多くは、富裕層の出身者である。富裕層の出身で且つ高学歴の人物が、恋愛と社会(立身出世)の狭間で苦悩するといった、例えば、坪内逍遥『当世書生気質』(明治十八～十九年)、森鷗外『舞姫』(明治二十三年)がその代表格であろう。

そんな中、貧者の生を執拗に文学の主題とした作家もいた。その代表格は、硯友社出身の広津柳浪である。川上眉山も貧者を取り上げている。そして、川上眉山と交流のあった樋口一葉もまた、貧者を描いた。一葉の場合は、貧者の実相をつぶさに描き出すということが主たるテーマではなかった。貧者が、貧しさに抵抗し、貧しさから這い上がろうとする人物が登場したり、あるいは、貧者と富裕層との交わりを通して、貧者の怨念を主題とした物語が主流である。そこには、明治の格差社会に貧者として生きるものの情念が描き出され、読む者を引き付けて離さない。これまでの研究では、先にも触れたように、主人公お蘭の分析に偏りがちで、副主人公である直次郎、佐助・おそよ夫婦についての分析が不十分であり、そのことによってお蘭と直次郎、佐助・おそよ夫婦の関係性についての検証も偏りが見られ、また、立身出世主義についての検証もほとんどされていない。したがって、本稿では、『やみ夜』の基底にある立身出世の問題を、お蘭と直次郎双方が抱えている問題として着目し、その特質について考察してみたい。

二、直次郎の生い立ちと〈世間〉への恨み

まずは、副主人公である高木直次郎から見ていこう。直次郎の実父は、祖父の代までは「一郷の名医と呼ばれ」ていた家柄

であったが、直次郎の父は、直次郎が生まれる前に若くして亡くなり、家運は下がる一方だったと説明されている。また、直次郎の母は、実父の正妻では無かったため、親族らから疎外され、やっとの思いで直次郎を出産し、そのまま二十一歳の若さで亡くなった。そして、直次郎は母方の祖父によって育てられた。

直次郎は、両親不在の子どもであったために「世間の人に憎ま」れる幼少期を過ごした。祖父はそんな直次郎を不憫に思い、次のような思いで育ててきた。先行研究では、直次郎の祖父の話については、ほとんど掘り下げられてはいないが、作品のプロットを摑むうえで重要だと思われるので、以下、引用する。

世間は我等が仇敵にして、我等は遂に世間と戦ふべき身なり、祖父なき後は何處に行きても人の心はつれなければ夢いさゝかも他人に心をゆるさず、（中略）生中人に媚びて心にもなき追従に破れ草鞋の踏みつけらるゝ處業はすなとて口惜し涙に明けくれの無念はれ間なく、我が孫かはゆきほど世の人憎ければ（以下、略）

この引用箇所から、両親のいない直次郎が「世間」から不当に貶められることに対する祖父の憤りと共に、人生においてどんなに不条理な目に遭っても「世間」に媚びへつらうことなく、「世間」と戦えと祖父が教育してきたことが分かる。

「世間」が敵であったことは、お蘭にとっても同じことであった。実父が濡れ衣を着せられたことにより自殺したことで、松川家は「世間」から「あれゆく門に馬車あとたえて行かば恐ろし」と言われ、誰も寄り付かなくなり、お蘭とお蘭に仕える佐助、おそよ夫婦の三人は、「世間」の方から拒絶される形で暮らしていた。お蘭と直次郎は家の繁栄の没落後を生きている点で共通しており、どちらも「世間」から拒絶されている点においても同じ状況下を生きていた。

直次郎に話を戻せば、このように直次郎を思って「世間」と戦ってきた祖父も直次郎が十三歳になる頃、病気のため他界し、直次郎は十九歳のときに「母と祖父との恨みを負ひ」医者になることを決意して東京へ出る。直次郎は「鹿野山」の近くの村「天羽郡」で育ったと書かれている。「鹿野山」は、現在の千葉県君津市にある山であるから、直次郎はその辺りにあった村から東京へと出てきたことになる。天涯孤独の身になった田舎の青年を、医者になるという大望を背負って東京へ向かわせた原動力とは一体なんだったのだろうか。

直次郎の産みの母は、直次郎を身ごもっている時に夫を亡くし、「卑賤の身」と言われる出身であったために、夫の死後に

は周囲から「草がくれ妻」と言われ、直次郎を身ごもった体で田舎に帰り、直次郎を産んだ直後に他界した。そんな不遇の一生を遂げた直次郎の母が受けた屈辱が如何ほどのものだったか、そして、身ごもった若い女性が夫を喪う心細さが如何ほどのものだったかは想像に難くないだろう。そして、母の顔も知らずに育った直次郎は、自分を育ててくれた祖父と共に、母が世間から受けた屈辱を背負って生きていた。「親なし子と落としめる奴原（略）神もなき仏もなき世」と戦うことが、祖父と直次郎の信念だったのである。唯一の身内であった祖父が他界し、身寄りの無くなった直次郎は、母と祖父が受けた「世間」からの仕打ちへの「恨み」と戦うために、父の家業であった医者になることを決意して東京に出たのである。「世間」への「恨み」を忘れず、それを原動力として世間を生きて行くことが、直次郎の唯一の支えだった。E・H・キンモンスは、『立身出世の社会史―サムライからサラリーマンへ』で明治期における「立身出世」は、「出世の野心をもつ者に対して用いられる言葉」であり、「故郷の村を去り（世を出る）、自分の出世の枠組みからみた広い世界に入る（世に出る）必要があった」と説明している（注4）。直次郎が東京へ出て医者になると覚悟したことは、まさにキンモンスの指摘する明治期の立身出世の定義に合致するものである。

橋本のぞみ氏は、これまであまり取り上げてこられなかった、『やみ夜』の中の立身出世主義に着目し、直次郎の立身出世主義について考察しているが、橋本氏は直次郎について、「世間と自分との距離を、出世という評価軸でのみ測るために、流浪の身を抜け出せずにいる彼は強い疎外感を抱く」と述べている。しかし、直次郎が「出世」という評価軸でのみ自分の社会での立ち位置を測っているという分析だけでは、直次郎の「疎外感」（橋本氏）の説明としては不十分である。

直次郎の「疎外感」の起源は、橋本氏が考察するように、立身出世に執着するところにあるのではなく、両親のいない直次郎が幼少期に世間から「疎外」されたことで芽生えたものと読むべきではないだろうか。つまり、直次郎の孤独は、立身出世への執着が先立っていたからのものなのではなく、世間が先に「親なし子」という理由だけで不条理に彼を疎外したために、身寄りの無い直次郎は、立身出世に情熱を注ぐことでしか、自己の存在意味を見いだせない状況に追い込まれたということである。それは、先に見てきた祖父の教育とも繋がる。疎外されながらも、媚びへつらわない生き方を貫くためには、橋本氏の言うように「己の「定まりたる分際を知」り、「自分の現状を

それとして受け入れる」という現状肯定の人生観では、媚びへつらわず、医者になるという「野心」（キンモンス）を持って上京することなど不可能であっただろう。

直次郎は、作品内現在において十九歳の青年として設定されていて、作品が発表されたのが明治二十七年であるから、直次郎は明治八年生まれということになる。直次郎の父方が名医として地位の高い家柄であった時期は、幕末から明治初期にかけてと推定できるが、江戸時代の医者の身分は、士農工商の「工」に置かれていたが、実際には武士に準ずる地位にあった。それが、明治二～四年にかけて、長崎、大阪、東京で医学教育機関の整備が進められ、明治七年には、医師の法的根拠を規定する「医制」が出され、東京医学校が創立される。したがって、直次郎が、幼少期であった明治一〇年代には、西洋医学の導入と共に医師は高学歴の選ばれた人材の職業として、その地位が固められ始めた時期であった。当時、医者になるためには医術開業試験に合格する必要があった。また、医術開業試験は、明治八年から大正五年まで行われていた（注5）。医師免許は、医術開業試験合格者の他、医学教育機関の卒業者に対しては無試験で与えられた。医術開業試験については、事実上独学でも受験可能であった。したがって、直次郎のように医学校入学が困難な者でも、医師になる門戸は、一応は開かれていたようである。

門戸は開かれていたとは言え、直次郎には独学という厳しい状況で医師になる道しか残されていないうえ、医術開業試験の最低限必要とされた修学一年という条件を満たすことがすでに容易なことではなかった。竹内洋氏によれば、明治二十三年頃の「学資は年額八十円から百二十円」が必要で、直次郎のように地方から東京へ出て進学する場合には、「上京の前に保証人を準備しておく必要」があった（注6）。そうなると、身寄りのいない直次郎にとっては、学資を用意することも、東京で保証人を見つけることもどちらも、達成困難な難題であっただろう。したがって、先に少し触れたように、人に媚びるなという祖父の教えを自らの信念として内面化していた直次郎にとって、医師への道はなお困難なことであり、乞食同然で東京を彷徨っていたのだった。

明治に入り、江戸時代の身分制が解体されたことにより、個人が自らの人生を選択し、向上させる可能性は一応は開かれた。直次郎にとっては、むしろ江戸時代の身分制を踏襲して家業であった医者を目指しているとも言えるが、すでに孤児となっている直次郎に医者になる門戸はまだまだ十分に開かれていなかった時代であった。つまり、立身出世主義の可能性は、限ら

れた者だけが獲得することができたチャンスであったと言えるだろう。これは、経済格差によって引き起こされる教育格差の一形態であり、直次郎は庇護者不在により、自らの努力が報われる可能性が極めて低いと言える格差社会の被害者だったのである。

直次郎は、東京の「木賃宿」の番頭で働いていたが、この「木賃宿」については、紀田順一郎の『東京の下層社会』に詳しい（注7）。『やみ夜』が書かれた頃の木賃宿では、個室の約八割が無灯火で、旅商人相手から日雇い労働者相手への宿へと変わり始めた時期だった。木賃宿の部屋では、日雇い労働者や車夫らが悪臭を放って、垢まみれの蒲団で寝ていた。作中、直次郎が乞食に見間違えられて激怒する場面もあり、直次郎は、木賃宿利用者である日雇い労働者と変わらない状況であったと推測できる。潔癖でプライドの高い青年であった直次郎は、乞食になることもできず、木賃宿を飛び出し彷徨っていたときに、お蘭の住む松川邸前で、お蘭の恋人であった衆議院議員の波崎の乗った車に轢かれ、倒れているところを佐助夫婦に助けられ、直次郎の運命は、このとき転機を迎えることになるのである。

三．お蘭の中に潜む立身出世意識について
―波崎への執着の意味

では、お蘭は、立身出世主義の問題とは関係なく、先行研究がこれまで指摘したように、例えば、お蘭をめぐる物語は、「無念のうちに自死した父の怨念が重なった父娘の復讐物語」であり、お蘭は「父の存在に呪縛される娘」（関礼子）など自殺した父の恨みをはらすことが最大の目的だったのであろうか（注8）。あるいは、北田幸恵氏が指摘したように、お蘭は「家父長制の異端者」で「自我を抑圧する制度と対立」していたのだろうか（注9）。

お蘭は、当時の女性の婚期としての適齢期をとうに過ぎてしまっている二十五歳になるまで波崎との結婚の可能性を諦めきれずにいた。自殺した父の恩恵で政界へ出て出世し、自分を捨てた波崎を恨みながらも、なぜ、八年もの長い間待ち続けたのか、これはとても不可解なことである。これについては、お蘭は「自分を裏切った波崎の庇護を受け入れているかもしれない」（峯村至津子）という指摘もあり、その可能性も無くはない（注10）。しかし、その可能性があるにせよ、作中ではそれを証明する手掛かりはないし、「庇護を受け入れ」ていたか否かにか

かわらず、お蘭は、他の男性と結婚する道を探っても良かったはずである。

女性と結婚の問題について考える際にひとつの目安となるのは、どのような家柄に生まれ、どのような教育を受けてきたかであるが、作中においてお蘭がどのような教育を受けてきたのかについては説明されておらず、お蘭に内面化された女子教育の成果がどのようなものであったのかは、明確にはわからない。しかし、黒岩比佐子氏は、「明治のお嬢様たちのめざすべきゴールは、明らかに結婚だった」と端的に述べていて、そのような「お嬢様」たちの「令嬢教育」が行われた初めての学校は、明治十八年七月に開校した「華族女学校」だったと考察している（注11）。お蘭は、「天のなせる麗質よきは顔のみか、姿と、のひて育ちも美事」と語り手によって説明され、さらに、松川家が財産家であったと語られているから、上流階級の出身である令嬢だったと言え、お蘭にとっても「めざすべきゴール」は結婚だったと言っていいだろう。例えば、広津柳浪の『女子参政蜃中楼』（明治二十四年）で、上流階級の令嬢として登場する松山操などは、「目指すべきゴール」として有望な政治家との結婚を実現させることを目的としている女性として描かれている（注12）。このような令嬢たちの「目指すべきゴール」＝結婚は、女性にとっての立身出世意識の表れである。したがって、お蘭の波崎への執着も、お蘭にとっての立身出世欲を背景にしたものと言えるのである。

お蘭の父が自殺したのはお蘭が十七歳の時で、お蘭と美男子の衆議院議員だった波崎は、父が存命中から恋人関係にあり、将来は結婚するものと思われていた仲だった。しかし、波崎が外遊中にお蘭の父は自殺し、帰国した時には、松川家は低迷し、廃墟同様であった。波崎は、このような低迷した家の娘であるお蘭と結婚するのは、自身の立身出世にとって不利と考え、お蘭と結婚をしなかった。にもかかわらず、お蘭は、「もしやに引かれて」波崎との結婚の可能性を期待して待つ自分の身の上を思い、「とても狂はゞ一世を暗にして（中略）我れながら女夜叉の本性さても恐ろしけれど、かく成りゆくはこれまでの人なり、悔まじ恨まじ浮世は夢と、これや恋をしをりに浅ましの観念」と思いつめる。ここで注意しなければならないのは、お蘭の苦悩の種は、波崎への恋情だったとお蘭自身は語っているのだが、その割には、波崎への愛情そのものの様相が作中で語られることは無いということである。ただ「恨み」として語られ、望みのない恋の成就に期待して待ち続けるわが身を憐れむ視点しか、お蘭にも語り手にも無いのである。お蘭は、作中に

おいて、波崎の出世のために都合よく利用され裏切られた立場であるから、恋愛の被害者とも言えるが、同時にお蘭の恋愛感情は多分にエゴイスティックな性質を持ったものであった。だから、恋愛対象としての波崎を一人の男性として純粋にまなざす視点や、波崎への問いかけは作中で見られないのである。

もしも、お蘭が、本当に波崎のことを愛していたのなら、波崎への並々ならぬ愛情そのものが苦悩として物語の中心になるのが自然だと思うが、そうではない。お蘭が抱いた「もしや」という期待は、松川家が低迷した反動から来ているとも言える、お蘭自身の栄達への欲望の表れなのである。つまり、女性の中の立身出世欲をお蘭は表象しているのである。波崎への恋情はたしかにあったのだろうが、その恋情は十代の少女の恋情であって、ましてや、父の人脈を通じて巡り会った相手への恋慕だから、ひとりの女性としての自律した恋愛感情とは言い難いものであっただろう。そして、父の死によって、十代だったお蘭は政界の権力、世間の薄情さを突き付けられることになる。こうしてお蘭の波崎への恋情は、政界の権力に対する恨みと世間への恨みを晴らし、お蘭自身の復権を実現するための結婚という欲望へと変質したと言えるだろう。それは、通俗的な言い方をすれば、計画的に玉の輿に乗ることを意味している。計画的な玉の輿は、女性にとっての立身出世欲の表れである。お蘭も玉の輿に乗ることで恨みを晴らし、自己の再起を考えていたと考えるのは自然なことである。

これまでの『やみ夜』論では、管見した限りでは、お蘭の立身出世主義の問題は触れられてこなかった。お蘭自身も、お蘭について語る語り手も、お蘭の中にある立身出世主義に気が付いておらず、それどころか、直次郎よりも立身出世という競争原理に直接には組み込まれてはいなかったお蘭は、立身出世に距離を取り、それを批評する視点も持っている。ゆえに、お蘭自身の立身出世意識は見落とされてきたと言えるだろう。

四．権力に抗う運命共同体
―お蘭と直次郎、佐助・おそよ夫婦

直次郎が医者を志して上京してきたことを知ったお蘭が直次郎に、「学費の出どころが無くば一段と難儀」で、「夫れが精神一到と其方は言ふか知らねど、其方の実の潔白沙汰は今の世の石瓦。此やうのことは口にするは厭なれど丸うならねば思う事は遂げられまじ、其会得がつきたらば随分おもふ事は貫くが宜けれど、何うやら其辺が六づかしくはなきかと」と助言する場面がある。これは、世間の体質も直次郎の性質も、よく見抜い

ているお蘭の言葉である。

このお蘭の核心を突いた助言によって、直次郎は医者になることを潔く手放し、「我れはお蘭様に命と申す、此一言を金打にして、心に浮世のさまざまな思ひ断ちたれば生死は御心のままに」と言って、直次郎は立身出世の道から身を引き、お蘭に自分の命を捧げると決意する。

この直次郎の決意が、物語のクライマックスでの波崎暗殺未遂へと繋がるのだが、波崎暗殺未遂に至る物語の展開について、関良一氏は「「やみ夜」は政治社会の頽廃に取材した本格的な社会小説」だと指摘し(注13)、また、前田愛氏は、「松川屋敷の闇と死の世界は、(中略)明治社会総体につきつけられた陰鬱な反世界」だと指摘した(注14)。一方、お蘭が、直次郎を利用して波崎暗殺を試みたこと、また、お蘭自身が自らを「女夜叉」と作中で表現したことから、「悪女」(北川秋雄)(注15)、「魔女」(北田幸恵)という前提で、お蘭の解釈は進められてきた。松川邸の廃墟のイメージについては、例えば、北田幸恵氏は、「『やみ夜』の世界は、(中略)怨恨のこもった、独自の〈闇夜の風景〉」を描き出し、お蘭の「「深く思ひいりたる」眼、「折折にさゞ波うつ」「愁ひ」をふくんだ眉は、お蘭の内部の精神の鬱屈、心理の暗闇の表象」だと指摘して、『やみ夜』の通奏低音として、松川邸の屋敷やお蘭の描写、お蘭の父が自死した邸内の池が、〈闇〉を表象する仕掛けとして取り入れられていると指摘している(注16)。

たしかに、『やみ夜』という作品名がすでに、読者に混沌とした出口の見えない暗闇を想起させる仕掛けになっている。しかしながら、果たして、作者の意図には、松川邸と松川邸で暮らすお蘭、佐助・おそよ夫婦、直次郎の生活と命運を〈闇〉とする意識しかなかったと言って、そこで作品の読みを収束させてしまってよいだろうか。

ここで注意しておきたいのは、作中においてお蘭を「魔性」を帯びた「女夜叉」と述べているのはお蘭による自己表象であって、直次郎も佐助・おそよ夫婦も、そして波崎までもがそのようにお蘭を捉えてはいないし、語り手もお蘭を「女夜叉」として語ってはいないという点である。それどころか、直次郎と佐助夫婦には、「女菩薩」、大切なお嬢様として神格化さえされている。お蘭が、直次郎らに自分の本性を隠しているだけで、直次郎や佐助夫婦は騙されているとは、到底思えない。お蘭の世間に対する「恨み」をむしろ共有しているのが直次郎と佐助夫婦であり、佐助などは、波崎の車に轢かれた「恨み」を忘れていなかった直次郎に、「其夜の恨みを忘れぬとは感心にて頼母しゝ」と「恨み」を忘れない執念を評価している。つまり、こ

の佐助の言葉は、お蘭の「魔性」が、お蘭ひとりのものだけではなく、佐助にも直次郎にも共有されていたものであったことを表しているのである。佐助の恨みの内実については何も説明されてはいないが、少なくとも、佐助も松川家が受けた世間から疎外されるという見えない暴力による負債をお蘭と共に背負って生きているのであり、お蘭、直次郎、佐助夫婦にとって「恨み」を持つことは、立身出世によって勝者となったものが支配する権力社会が持つ暴力性への抵抗であり、闘争であったのである。

直次郎は、自分を車で轢いた波崎とお蘭が恋人関係にあったことへの激しい嫉妬を抱いていることをお蘭に打ち明け、自分の嫉妬は、お蘭にとっては「仇」にしかならないから、自分は死ぬことを決意したと告白する。ここも非常に重要な場面で、自分の嫉妬のためにお蘭を苦しめることになるくらいなら、自分は命を絶つことでお蘭を守ると言っているのである。では、お蘭はそれを「魔性」の女の本性を剥き出しにして、その直次郎の告白を利用して波崎暗殺を実行させようと目論んだと言えるだろうか？　これまでの先行研究では、お蘭の語る自己表象の強烈さと、結末の波崎暗殺計画のインパクトの強さのために、このようにお蘭を解釈する傾向が強かった。しかしそうではなく、お蘭は直次郎の不遇な生い立ち、不条理な世間の中で浮かばれることのなかった直次郎の苦悩を理解し、深く共有していたからこそ、自死するくらいなら人の恩を利用して立身出世に猛進する波崎を暗殺する――つまり、「世間」から抹殺する――ことを直次郎に提案したのである。

このように『やみ夜』では、「恨み」を持つことが肯定されている。したがって、「恨み」を晴らすこと、不条理な世間の暴力、立身出世の陰で不幸を強いられたことへの命を賭しての反逆を、お蘭も決死の覚悟で直次郎に託したと言えるだろう。不可視の暴力によって、不当に他者を排除する構造を持ち合わせた世間と立身出世主義への抵抗と闘争の決着は、『やみ夜』においてはテロリズムという行為でしかつけられなかったのである。

直次郎が、お蘭への愛情を告白した場面で、直次郎からの愛情の告白を受けたお蘭は、この世では直次郎とお蘭の間には結婚という縁は無かったけれども、「今日より蘭が心の良人に成りて、蘭をば吾が妻と呼ばせ給へ」と返事をする（傍点・引用者）。これは、婚姻制度に縛られない、一対の男女の当人同士の純粋な意思による〈契り〉が交わされたことを意味する。お蘭と直次郎は、世間から疎まれ、排除され、世間と闘う同志として制

度としての婚姻をも超越しているのである。直次郎は、お蘭を一人の女性として愛していた。一方、お蘭は、波崎を愛していたわけでもなく、直次郎のことも一人の男性として愛していたわけではない。しかし、お蘭は、直次郎のひたむきで一途な想いに、「心の良人」になってほしいと伝えることで受け止めたのである。そして、お蘭が、直次郎との結婚にも踏み込んでいかなかったのは、お蘭にとっての最大の課題は、実父に濡れ衣を着せ、自死へと追い込み、自分から結婚のチャンスを奪った政界に象徴される権力への復讐だったからだと言えるだろう。

このようなお蘭と直次郎の関係について、北田幸恵氏は、「二人の関係は現世の縁、男女の性さえも超越し、共同の情念で結ばれた関係であり」、「絶対的な魂の合一」と考察している。北田氏の「共同の情念で結ばれた関係」という指摘には同意できるが、直次郎とお蘭が「男女の性さえも超越し」ているという点については、そうは言いきれないのではないかと思われる。そもそもお蘭は、「蘭が心の良人に成りて、蘭をば吾が妻と呼ばせ給へ」と、お蘭と直次郎の関係性を男女の「性」を前提にして述べているのだから、北田氏の分析のように「男女の性さえも超越」しているとは言い難い。少なくとも、お蘭と波崎の関係に嫉妬する直次郎は「男女の性を超越」しているとは到底言えず、お蘭も一人の女性として「吾が妻と呼ばせ給へ」と言って、直次郎の愛情に応えたのである。

逆に、北田氏の「共同の情念で結ばれた関係」という指摘については、この指摘をお蘭と直次郎の関係にだけ当てはめるのではなく、より広く捉え直して、佐助・おそよ夫婦の存在も「共同の情念で結ばれた関係」の中に取り込むべきだと考える。佐助夫婦の存在は、お蘭の強烈な描写により影の薄いものとなっているが、しかし、佐助夫婦が作中で果たしている役割は大きく、「共同の情念」の内実は老いた佐助夫婦をも含む、世代と血縁関係をも超越した、立身出世主義が蔓延しつつあった「浮世」を真の敵とする「共同の情念」（北田氏）で結ばれた繋がりであったと言えるだろう。ここにこそ、作者一葉の人間を見る眼差しの深みと制度の中に収まらない人間関係の広がりが秘められているのではないだろうか。

五．「世間は広し、汽車は国中に通ずる頃なれば」の意味

さて、作中では、テロ実行後の直次郎の安否は分からず、お蘭、佐助夫婦も松川邸から姿を消したこと以外には何も明かされていないが、テロ実行後を語る語りは、淡々とした語り口であり、

テロが失敗に終わったことも、お蘭、佐助夫婦、直次郎の行方が分からないままであることについても、感情的には語られていない。テロは、波崎を待ち受けていた直次郎が、刃物で波崎の首を切ろうと襲い掛かるが、刃は波崎の頬をかすめただけで失敗に終わり、事件後については、次のように語られている。

明日は新聞に見出しの文字こと〴〵しく、ある党派の壮士なるべし、何々倶楽部の誰れとやら嫌疑のかゝりて其筋に引かれぬといふもあれば、遂ひには何者の業とも知れで一月の後には風説のあともなく成りぬ、疵は猶さら半月の療治に可惜男の直も下がらず、よし痕は残るとも向ひ疵とてほこられんか可笑し、才子の君、利口の君萬々歳の世に又もや遣りそこねて身は日蔭者の此世にありとも天地ひろからぬ直次郎はいかにしたる、川に沈みしか山に隠れしか、（中略）佐助夫婦おらんも何處に行きたる。

『やみ夜』の語り手は、作品全体を通しては直次郎に同情的な、と言うよりも、直次郎に寄り添う位置から語り、時折、語り手と直次郎とが一体になっているとさえ感じさせる箇所もある。同時に、この語り手は、直次郎、お蘭、佐助夫婦から距離を取り、「世間」のある一コマを淡々と語る位置に立つこともあり、引用した箇所も含め、テロ失敗後の語りは、このような地平から語られていると言える。

そして、作品は、「世間は広し、汽車は国中に通ずる頃なれば」という一文で閉じられる（傍点・引用者）。テロリズム実行までの重苦しい、戦慄するような緊張感とは裏腹に、結末の語りは穏やかでさえある。興味深いのは、作中において頻出する「世間」の内実と、この最後の一文での「世間」とでは意味合いが違っているということである。

一葉の作品には、「世間」と登場人物との間の齟齬や確執が作品の底部に流れている。『やみ夜』においても、本稿で見てきたとおり、お蘭と佐助夫婦、直次郎ともに個々の生活圏内としての「世間」から疎外され、その結果、「世間」と距離を取って生きるしかなかった。作品中、随所に「世間」、「浮世」が頻出していて、松川邸の俗世と相容れない様相や、直次郎と佐助夫婦によって表象されるお蘭の「女菩薩」などは、作中において反俗的なイメージを際立たせる役割を果たしている。

阿部謹也氏は、明治以降「世間」という語が文章の中から姿を消し、その代わりに「社会」という言葉が使われ始めたことを指摘している（注17）。しかし、阿部氏は、明治以降に「社会」という言葉が学術の世界で使われるようになっても、庶民の日常会話から「世間」という言葉が消えることはなく、明治以降

も依然として「多くの日本人にとって」、「世間」は「比較的狭い」ものであったと指摘している。『やみ夜』における「世間」も、阿部氏の指摘する「狭い」範囲を指すものであるが、そうなると、作品末尾の「世間は広し」は、狭い「世間」を超えた「社会」を志向する意味合いが込められていると言えるだろう。「世間」が広いものであるという伏線は、生存し続けるための基盤を持つうえでの可能性の広がりを予感させる。ましてや、物語の結末はテロリズムの失敗であるから、当然、実行犯である直次郎と、主犯にあたるお蘭に明るい未来など訪れるはずはない。にもかかわらず、「世間は広し」と結ぶことで、お蘭と直次郎、佐助夫婦に新たな「世間」への可能性を感じさせていると言えるだろう。少なくとも、閉じられてはいないのである。

また、「汽車」についても、新たな「世間」へと開かれていく可能性を感じさせるものとしてその役割を担っている。「汽車」の考察については、例えば、塚本章子氏は、「汽車によって均質化されつつ広がっていく空間が示され、近代国民国家の統合が示唆されている」とし(注18)、菅聡子氏は、「「闇夜の足場よき処をもとめて」直次郎が行動を起こしたところで、〈近代〉の前には敗れ去っていかざるを得ないのである」と述べている(注19)。塚本氏も菅氏も、近代化の一つの象徴である「汽車」を、お蘭と直次郎によるテロが未遂に終わり、被害者である波崎が、そのテロ未遂の際に受けた傷を逆手にとって、出世して行くことを予感させる作品の終わりのイメージと重ね合わせて、末尾に作者が用いた「汽車」をマイナスイメージで解釈している。つまり、立ちはだかる「〈近代〉」に歯向かった時、反逆者は敗北せざるを得ないという読みの枠組みの延長で「汽車」を解釈しているのである。

岩倉具視らによって設立された日本鉄道株式会社が、日本初の私設鉄道会社として認可されたのは明治十四年のことであったが、明治政府にとって鉄道を整備することは、小牟田哲彦氏によれば、「経済性よりも政治性を強く帯びていた」のであり(注20)、また、東島誠氏は、当時の「交通」とは「思想を運輸する」という意味が強かったという指摘をしている(注21)。実際、中江兆民は、鉄道の役割について「思想を運輸する」、「世論を運輸する」ということを述べているが、これは、明治期において「鉄道」に期待されていたことが、思想、世論の伝播にあったことを示している。したがって、作者の鉄道観もマイナスイメージではなく、より開かれた可能性を秘めたものだったと推測でき、お蘭が直次郎に託したテロについても、たとえそのテロが未遂に終わっても、それを悲劇とばかりは捉えていないと言えるだ

ろう。立身出世と家運の低迷の陰で、「恨み」を執念深く持ち続けることが肯定されている『やみ夜』において、まさに闇の如く襲い掛かってく不可視の暴力に抵抗する方途として、テロリズムは肯定されて作品は閉じられているのである。末尾の「世間は広し、汽車は国中に通ずる頃なれば」からは、決して、〈闇〉をただ〈闇〉として捉えるだけでは終わらない、執念深い上昇志向と「恨み」を原動力とした、世間一般の価値観では〈悪〉とされる行動を通して、闇をこじ開けていこうとする闘争的とも言える作者一葉の意思を読み取ることができるだろう。

もっとも、テロという行為でしか、手段を選択できなかったところに、全肯定できない側面は残る。しかし、テロ行為でしか直接行動を起こせない程に、立身出世の道から疎外された者、立身出世の陰で貶められた者たちは、閉塞された状況に生きるしかなかったということを、『やみ夜』は突き付けている作品だと言えるだろう。

六．おわりに

さて、本稿では、これまで見落とされがちであったと言える、お蘭と直次郎の中の立身出世意識の内実について検証してきた。お蘭の、波崎との結婚をめぐる立身出世意識についての指摘は、これまで皆無であったと言っていいだろう。結婚をめぐる立身出世意識の問題について、例えば、石井洋二郎氏は、友人関係や恋愛関係などは「一見無償の感情によってこれを形成しているように見えるが、じつは無意識のうちに、その人物とつきあうことが自分になんらかの利潤をもたらすと判断している」とし、いくら純粋な両者の愛情関係で結ばれていると思われている結婚であっても、そこにはピエール・ブルデューの言う「実践感覚」に基づいた「婚姻戦略」が成立していると指摘している（注22）。つまり、「純粋」と思われているものについても、実は各自にとって不利にならないように計算されている側面があることは拭えないということである。お蘭の波崎への執着も、「実践感覚」（ブルデュー）に基づいた「婚姻戦略」であり、これは女性における立身出世意識の表れなのである。

以上の考察から、私たちは、『やみ夜』以外の一葉作品を読むうえで、立身出世の問題を、男性のみに内面化された問題として見るのではなく、女性も結婚という方法による立身出世意識が働いている可能性にも着目する必要があるのではないだろうか。もっと言えばそれは、一葉作品に限らず、日本近代文学における女性と結婚の問題、婚姻に見られる階層意識の問題を

考察するうえでも、重要な視点だと思われる。そして、石井氏の言う、「自分になんらかの利潤をもたらす」という「実践感覚」（ブルデュー）という見方からも越え出ているのが、テロの実行をも可能にするほどの世間への恨みという情念によってつながっていたお蘭、直次郎、佐助夫婦だと言えるだろう。

さて、立身出世主義は、近代以降の日本人にとって強迫観念の如く急迫し、生き甲斐でもあり、苦悩の元凶でもあった。万人に平等にチャンスが開かれているかのように見えながら、実はそうではなく、受験戦争、競争社会といった言葉が象徴するように、立身出世主義は勝者と敗者を明確に分け、勝者になっていくためであれば、疎外や真実の隠蔽、差別といった可視化されない暴力によって、他者を不当に蹴落としていくことを暗黙の了解とする不条理を生み出すメカニズムを孕んでいるものなのである。これは、現代日本社会が抱える格差問題と構造は同じであり、日本近代の歴史には、格差の歴史も厳然として存在し続けてきたのである。

立身出世の道からはじき出された人間が報われないまま、格差社会の中で恨みを抱えた時、作者一葉がテロを持ってしか作品の結末を用意できなかったところに、日本近代の閉塞性が表現されているのであり、この点が、現代にも通底する、格差社会を生きる私たちへの『やみ夜』からの最大のメッセージなのではないだろうか。

注1　北川秋雄「「やみ夜」論―年上の悪女―」（『論集樋口一葉Ⅲ』所収、おうふう、二〇〇二）。

2　竹内清美「「暗夜」と『文学界』」（『日本文学』四六号、一九九七）。

3　橋本のぞみ「『やみ夜』―傀儡の他者性―」（『国文目白』第三七号、一九九八）。

4　E・H・キンモンス『立身出世の社会史　サムライからサラリーマンへ』（玉川大学出版部、一九九五）。

5　長与健夫「医学教育制度の変革・漢方から洋学へ：浅井国幹と長与専斎の相剋を中心にして」（『日本医史学雑誌』第43巻第4号、一九九七年）。

6　竹内洋『立身出世主義　近代日本のロマンと欲望』（世界思想社、二〇〇三）。

7　紀田順一郎『東京の下層社会』（『紀田順一郎著作集』第二巻、三一書房、一九九七）。

8　関礼子「「暗夜」の相互テクスト性再考」（『国文学　解釈と鑑賞』第六八巻九号、二〇〇三）。

9　北田幸恵「越境する女・お蘭―『やみ夜』論」（『樋口一葉を読みなおす』、新・フェミニズム批評の会編、學藝書林、一九九四）。

10　峯村至津子「〈烈女幻想〉の揺らぎ―樋口一葉「やみ夜」再考―」（『国語国文』八七三号、二〇〇七）。

11　黒岩比佐子『明治のお嬢さま』（角川選書、二〇〇八）。

12　これについては、拙稿「広津柳浪『女子参政蜃中楼』―自由民権運動と女性」（『近代文学研究』27号、二〇一一）で論じている。

13　関良一「晩年の一葉　下」（「国語国文」、一九四四）。

14　前田愛「一葉の転機―『闇夜』の意味するもの―」（『文学』、一九七三・九）。

15　注1に同じ。

16　注9に同じ。

17　阿部謹也『「世間」とは何か』（講談社現代新書、一九九五）。

18　塚本章子「樋口一葉「暗夜」論―交錯する「闇」の諸相―」（「近代文学試論」、一九九九）。

19　菅聡子『新日本古典文学大系明治編24　樋口一葉集』

20　小牟田哲彦『鉄道と国家　「我田引鉄」の近代史』（講談社現代新書、二〇一二）。

21　東島誠『〈つながり〉の精神史』（講談社現代新書、二〇一二）。

22　石井洋二郎『差異と欲望　ブルデュー『ディスタンクシオン』を読む』（藤原書店、一九九三）。

【追記】

『やみ夜』の引用は、『樋口一葉全集』第一巻（筑摩書房、一九七四）に拠った。なお、適宜、ルビは省略し、旧字体は新字体に改めた。本稿は、二〇一二年度日本近代文学会秋季大会（於・ノートルダム清心女子大学）で口頭発表したものを論文化したものである。発表後の質疑応答などで、多くの貴重なご教示を賜りました。この場をお借りして、心よりお礼申し上げます。

（にしむら　えつこ／二〇〇三年度博士前期課程修了、神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程在籍）